

『弥生米の終着駅 田舎館村誌 上巻』

福井 敏隆

現在、青森県内では自治体史（誌）の編纂が盛んである。県内六七市町村のうち、約三分の一の市町村史（誌）の編纂事業が進行中である。平成八年度からは青森市史と県史の編纂事業がスタートしたし、来年度から八戸市で再び市史の編纂事業が始まると聞いている。

これらの編纂事業の進め方には三つのパターンがあるという。それは①県内外の学職経験者を集めて行うもの、②市町村内部の有識者だけで行うもの、③全く外部発注してしまうもの、の三つである。これから、書評と紹介を行う『弥生米の終着駅 田舎館村誌 上巻』は、一応②のパターンにはいるが、村外の学識経験者の応援も求めており、規模は大きくないが①に近い進め方で編纂事業が行われている。

田舎館村誌編纂事業は平成十二年の村合併四十五周年記念事業の一つとして、平成四年四月から八年計画でスタートし、平成九年三月に全三巻のうち『上巻』が刊行された。巻末の編纂関係資料をみると、(一)村民のための村誌・(二)村を育てる村誌・(三)村の大地に刻まれた歴史を重んじた村誌・(四)学問的に価値の高い村誌、がめざす村誌の性格として位置付けられている。全体的に記述は平易であり、今まで田舎館村郷土誌研究会が刊行してきた「館城文化」の研究成果がかなり生かされている。そ

れでは、八四八頁にわたる本書の構成をみてみよう。

第一編 田舎館村のあゆみ（上）

第一章 遺跡よりみた田舎館村

第二章 垂柳遺跡

第三章 田舎館村の古墳時代

第四章 田舎館村の古代

第五章 田舎館村の鎌倉時代

第六章 田舎館村の南北朝時代

第七章 田舎館村の室町時代

第八章 田舎館村と千徳氏

第九章 消えた村と寺

第十章 中世の村民生活

第十一章 田舎館村の江戸時代

第十二章 田舎館村の近代

第二編 田舎館村の自然（上）

第一章 田舎館村の生物的環境

第二章 植物

第三章 哺乳動物

第四章 鳥類

第五章 両生類・爬虫類

第六章 魚類

第七章 節足動物

第八章 軟体動物など

第九章 村内の自然関係の資料について

第三編 田舎館村の村民生活(上)

第一章 昭和時代(戦後)の生活

第二章 昭和時代(戦前)の生活

第三章 保健衛生

第四編 田舎館村の交通・通信

第一章 村の古道、旧道

第二章 村の橋

第三章 奥羽本線の開通

第四章 村の交通機関

第五章 田舎館村の郵便局と電話

第五編 田舎館村の文化財と旧跡

第一章 青森県指定の文化財

第二章 田舎館村指定の文化財

第三章 地域の旧跡と文化財

この構成からわかるように、本書は第一編が村史、第二編が自然史、第三編が民俗史、第四編が交通史、第五編が文化財史の体裁をとっている。筆者には、専門外である第二編と第三編について詳しく論究をする力はないが、順におおよその内容を紹介し、書評を述べさせていただくことにする。

第一編 田舎館村のあゆみ(上)

田舎館村の近代までの通史である。時代区分の上では原始・古代・中世・近世・近代という流れに従いながら、個々の特徴的な項目立ても行うという形式をとっている。歴史の縦の流れと、横の流れを適度にとり入れた構成である。田舎館村といえ、何といっても垂柳遺跡の存在を無視できない。昭和五六年(一九八一)に国道一〇二号バイパス建設に伴う試掘調査で一〇数枚の弥生時代中期の水田跡が発見された。さらに、昭和五七・五八年(一九八二・一九八三)に本調査が行われ、面積四〇〇〇平方メートル、枚数にして六五六枚の水田跡が発見されたのである。この垂柳遺跡の紹介は第二章で行われているが、その内容は単に垂柳遺跡を詳細に紹介するにとどまらず、青森県の弥生時代における水田耕作の存在証明に情熱を傾けた、故伊東信雄・故工藤正両氏の苦悩の歴史でもあったことを物語っている。現在の青森県では縄文時代前期～中期の遺跡である三内丸山遺跡にのみ全国的に注目が集まっている感があるが、それと同じ熱い視線が一九八〇年代初頭にこの垂柳遺跡に全国から注がれたことを忘れてはならない。また、弥生時代に青森県で水田耕作が行われていたという事実は、青森県農業史上の大きな事実であるばかりでなく、日本考古学上の重大な発見であった。昭和五九～六三年(一九八四～一九八八)まで発掘調査が行われた弘前市の砂沢遺跡で、弥生時代前期の水田跡が六枚発見されたことによって、日本最北・東北地方最古というタイトルは垂柳遺跡からなくなったが、現在も当時の住居跡等の発見をめざして村教育委員会による地道な調査が継続されている。本書

のサブタイトル「弥生米の終着駅」は垂柳遺跡にちなんだものであることは明白であろう。

第五章の中では、第五節の「冬井郷」で、建武の新政期から南北朝期（一三三三～一三九二）にかけて津軽田舎郡に存在した「冬井郷（とごう）」がどこにあったのかということについて、田舎館村の大袋あたりではないかという結論が出されている。尾上町日沼の西端にある字「樋田（といだ）」と、日沼の西隣である田舎館村大袋にある字「樋田（といだ）」という地名からの擬定の仕方であるが、首肯出来よう。冬井郷には上・下があったと考えられているが、平川の流れの状態から日沼の樋田が上で大袋の樋田が下にあたるという見解（上流が上・下流が下）には、筆者は疑義をほさみたい。つまり、当時の平川の利用の仕方から考えると、平川→岩木川→十三湖のルートで日本海へ出ていたと思われ、逆に下流の大袋の樋田が上冬井郷で、上流の日沼の樋田が下冬井郷ではなかったろうか。また、両冬井郷の平川をはさんだ対岸に、境関館跡（弘前市境関）がある。冬井郷の領主がこの館主では、という考えも筆者には生まれて来る。ただ、第四節の「村の領主たち」のところで、「嘉元鐘」の施銭檀那として、見阿弥陀仏（時衆である）を落としているのは惜しまれる。このため第六章の第四節の中でも「施銭且那十四名」という記述になっている。施銭檀那は十五名である。

第六章では第一節で「河邊・桜葉郷の領主結城宗廣」、第二節で「結城氏の河邊桜葉郷の経営」と、田舎館村の南北朝時代における結城氏の活動と河邊桜葉郷についてのまとまった記述がある。従来、青森県の南北朝時代を語る時、南部氏・安藤氏・工藤氏・曾我氏についてはかな

らず触れられるが、結城氏の名前が出てくることはなかった。新しい研究の成果であろう。また、第四節の「田舎楯城主安保弥五郎入道」は、武蔵七党の丹党につながる安保氏についての記述であり、これも従来は見られなかった点である。ただ、第一節で鎌倉幕府滅亡時、北条高時が執権であったとされる書き方をしているが、これは得宗北条高時とすべきであろう。最後の執権は守時である。第五節の「曾我氏の滅亡」の記述のなかで、南部政長が後村上天皇から拝領した甲冑を青森県唯一の国宝としているが、これは現在八戸市の櫛引八幡宮所蔵の白糸威褱取鎧兜大袖付にあたる。同社には国宝として伝長慶天皇御料の赤糸威鎧兜大袖付もあり、これも誤解を招く表現といえよう。

第八章では田舎館村と千徳氏の歴史が記述されている。閉伊系千徳氏と一戸系千徳氏の違い、汗石千徳氏と田舎館千徳氏のつながりが詳述されている。筆者は千徳氏が閉伊系から一戸系へ変化し、汗石千徳氏も一戸系に変わったというのを初めて知った次第である。千徳氏は南部氏の一族だから、一戸系のみという知識しかなかった。また、「あとがき」で田舎館村では千徳氏を「チトク」と呼ぶことが多かったことが述べられているが、これも筆者にとつて耳新しいことであった。「千徳氏」は「仙徳氏」と書かれる場合もあるので、「セントク」以外には読めないと思われる。『南部藩 参考諸家系図』（国書刊行会刊）では「仙徳氏」として表記されている。それをあえて「チトク」と読むことは、南部氏の支配から離れようとする気持ちの反映であろうと「あとがき」では結論づけているが、ともあれ、地域的特徴の表れとして興味深いことである。第十一章では田舎館村の江戸時代について記述されているが、第一節

の「二本柳氏と田舎館村」から始まる。これは、津軽為信の津軽統一過程で重要な役割を演じ、田舎館城の攻略を行い落城させた二本柳三郎右衛門重次の功績と、その子孫二本柳氏の歴史を述べたものである。このような記述の仕方は、特徴的であるといえよう。以後、行政・検地・年貢・社会と一般的な分類による記述が多いが、第四節では「中村喜時と耕作断」、第六節では「民次郎一揆と田舎館組」と、第一節と同じく独立項的な記述がある。

「耕作断」は東北地方の代表的農書の一つである。今までも何度か活字化されているためか、本書では内容の概略説明しか記述されていないが、史(資)料集でも刊行する予定が組まれているならば、ぜひ全文を掲載していただきたいものである。

第二編 田舎館村の自然(上)

田舎館村は標高二〇一三〇メートル位で大部分は浅瀬石川による沖積平野である。その大半が水田とリングゴを中心とする園地であり、村の全面積二二・七二平方キロメートルのうち、林野・民有林面積がわずかにヘクタールだという。この数字には驚かされる。平地がほとんどでその多くが耕地となっているのは、垂柳遺跡に代表されるような農耕地の歴史が連続と続いて来たことの証拠であろう。その間には自然の変化があり、特に第二次世界大戦後の変化が大きいという。土地改良・機械力導入・毒性の強い農薬の使用等により、特に小型生物の生息環境が悪化し、それまでの植生やそれに依存する昆虫が激減した。さらに河川の毒性や

汚れは水生昆虫や小型魚類の減少のみならず、タガメ・ゲンゴロウ・ハグロトンボ・イバラトミヨなど特定の種の絶滅という結果をもたらした。しかし、最近では農薬の規制により河川や水田の毒性は低くなりカエルの仲間が復活してきており、ゴイサギやカワセミの姿も見られるようになってきているという。その時代の記録ということでは、今回の村誌の記録は将来的には貴重なものになると思われる。

第三編 田舎館村の村民生活(上)

三章で構成されているが、第三章の保健衛生は主に第二次世界大戦後の医療の変遷・環境衛生を記述したものである。第一章・第二章は村の生活をまとめたものである。第一章が第二次世界大戦後で、第二章が第二次世界大戦前という構成については、歴史的流れを重視すると逆のほうがよかつたのではないかという気がする。ただ、第一章の第二節「田舎館村風物詩」は、昭和二七年頃の村内各地区の生業や生活の特徴を描写したもので、村民の手になるものだけによく特徴が表されている。県内の他の市町村史(誌)には見られない大きな特徴といえよう。また同章の第三節に、衣食住・人生儀礼に関わる項目について村民に実施したアンケートが載っているが、これも後世貴重なデータになるものと思われる。第二章は戦前の衣食住についての聞き取り調査をまとめたものである。同じく、後世貴重なデータとなろう。最後の部分に話者一覧表が載っているが、明治四〇年代生まれの人が一番のお年寄である。だんだん明治時代のことからなくなっていくというところがひしひしと

感じられた。

第四編 田舎館村の交通・通信

交通と通信が記述されているが、江戸時代の街道として田舎館村に関わるのは、藤崎村（現藤崎町）で羽州街道から分岐して川部→堂野前→黒石（現黒石市）に至るルート（黒石・山形街道と和徳（現弘前市）から日沼（現尾上町）→田舎館→高日（樋）→追子野木（現黒石市）と通じるルート）の黒石・山形街道の二本である。もちろん、その他の道についても触れているが、第一章で扱っている古道・旧道部分は少し記述が物足りない。黒石・山形街道の部分だけでも、江戸時代に果たした役割等について記述して欲しかったと思う。

また、奥羽本線・黒石線・五能線（陸奥鉄道社線についても含む）・弘南鉄道黒石線について第三章・第四章で記述しているが、前三線については川部駅をポイントに考察されたほうが良かったのではないかと思う。川部駅については第三章の第三節で特に記述している。この中で黒石線・陸奥鉄道社線（五能線の前身）についても触れているが、第四節でまた記述しているので、重複している。一方、弘南鉄道黒石線については第四章の中で第二節「弘南電車」として記述しているが、この章は鉄道とその他の交通機関は分けた方が良かったと思われる。つまり構成の上では、第三章には川部駅を中心とした鉄道関係（弘南鉄道を含む）の記述、第四章にはその他の交通機関の記述というようにすれば、もっとまとまりの良いものになったのではないかと思う。

第五編 田舎館村の文化財と旧跡

田舎館村に残る文化財や旧跡について記述されている部分だが、説明の部分と写真が分かれているのが気に掛かる。この上巻は八四八頁という大著であるのでいたし方ないが、出来れば説明と写真は同一頁で見られるような工夫がほしかった。また、分かれた場合は説明と写真が同一のものであるということがわかる番号をつけたほうが、読者にとっては親切であるように思う。

なお、最初の口絵部分に役場庁舎と円空仏が一緒に写っているが、この写真は役場庁舎前の庭に円空仏を配置して撮影したものと思われる。たいへん構図の面白い写真ではあるが、円空仏を直接地上に置いて撮影することは文化財保護の面からは望ましいことではなく、円空仏は写真合成にして口絵にはめこんでほしかったと思う。

以上、長々と書評とも紹介ともつかない文章を書いてきた。筆者の思い違いもあるので、関係各位から御批判等があるかもしれない。甘んじて受けたいと思う。最後に、本書の本文中にはいくつか誤字・誤植が見られるが、気になる点を一つだけあげておきたい。それは、口絵にある「伝千徳勝政武の佩刀」が「江義弘作」となっている点である。これは「郷義弘作」とするべきだと思う。口絵だけに目立ち気になった。

（田舎館村 A5版 八四八頁 付図1点 平成九年三月刊）

村民価格 一五〇〇円 村民外価格 三〇〇〇円）

（ふくい・としたか 弘前中央高等学校教諭）